

上野殿御返事

弘安元年 五七歳

餅九十枚・薯蕷^{やまのいも}五本、わざと御使ひをもつて正月三日^未ひつじの時に、駿河の国富士郡上野郷より甲州波木井の郷身延山のほら^谷へおくりたびて候。

夫海^{それ}辺には木を財^{たから}とし、山中には塩を財^{かんばつ}とす。旱魃には水をたからとし、闇中には灯を財とす。女人はを^夫とこを財とし、を^夫とこは女人をいのち^命とす。王は民をを^親やとし、民は食を天とす。この両三年は日本国の内に大疫起こりて人半分^減げんじて候上、去年の七月より大なる^飢けかちにて、さといちのむ^渴へんのものと山中の僧等^{いのち}は命存しがたし。其の上日蓮は法華経誹謗の国に生まれて威音王^{いおんのうぶつ}仏の末法の不^無軽菩薩のごとし。はた又歡喜増益^薄仏の末の覚徳比丘の如し。王もにくみ民もあ^怨だむ。衣も^薄うすく食も^乏とぼし。布衣はにしきの如し。くさ^錦のはは^草かん^葉ろと^甘を^露もう。其の上^思去年の十一月より雪つもりて山里路たえぬ。年返れども鳥の^訪声ならではをとづるゝ人なし。友に^誰あらずばたれか問ふべきと心^細ぼそくて過^{すこ}し候^{がんざん}処に、元三の内に十字九十枚、満月の如し。心中もあきらかに、生死の^闇やみも^晴はれぬべし。あはれなりあはれなり。こ^故うへのどのをこそ、いろあるを^色とこ^男と人は申せしに、其の御子なれば^紅くれないの^濃こきよしをつたへ給へるか。あいよりもあ^藍を^青く、水よりもつめ^冷たき氷かなと、ありがたしありがたし。恐々謹言。

正月三日

日蓮花押

上野殿御返事